

## ベトナムの情熱

国際ジャーナリスト

伊藤千尋

ベトナムに行くたびに社会の急激な変化に驚く。1989年の街は自転車の洪水で、首都でさえろくに交通信号がなかった。95年に訪れるとバイクの洪水に変わり、地方の町にも信号がついた。今や乗用車も加わり、山奥にも信号がつき、近代的な高速道路もできた。今年の4月30日でベトナム戦争の終結から40年。変わらないのは人々の情熱だ。



ベトナム戦争の当時を語るグエン・ティ・ビンさん (2013年 ハノイ)

ベトナム戦争の指導者が次々に世を去る中、数少ない歴史的な人物に会った。グエン・ティ・ビンさん。戦争終結への道を開いた1973年のパリ和平会談で、南ベトナム解放民族戦線を代表した女性だ。ジャングルから出てきたゲリラの代表がアオザイ姿だったため世界が驚いた。南北ベトナムの統一後は教育大臣、国家副主席を歴任した人である。

会ったのは2013年10月で、彼女は86歳だった。すでに公職は引退したが、平和の観点から開発について提言するNGOを立ち上げ活動していた。「私は休まない。国は解放されたが、今も山ほどの困難がある。これからもできることは何でもする」と凛として語る。彼女にとって解放戦争はなお続いている。

今の主な活動は南シナ海の領土をめぐる中国との衝突を避けることだ。「戦争がどんなものか、平和がどんなに尊いものか、私たちは世界の誰よりも知っている。国の再建のためには平和が必要

だ。友好や平和を大切にしたい」と彼女は話す。中国との領土問題といえは今の日本の問題でもある。だが、ベトナムは中国と地続きであるため、はるか昔から緊張関係を強いられてきた。

首都ハノイの歴史博物館には高さ1・5メートルから3メートルの杭が5本、展示してある。約700年前にベトナムを侵略した中国、当時の元を撃退するのに使われた実物だ。元軍が2度目に攻めてきたとき、モンソン(季節風)が吹いて元の船は沈没した。日本では元寇の際の台風を神風と呼んだが、同じことはベトナムでも起きたのだ。

しかし、元軍はベトナムを3度も侵略した。今度こそだめだと王は降伏に傾いたが將軍は諦めず、元の船が攻めてくる川の底に500本の杭を打たせた。干潮になって杭に引っかかり動けなくなった船を攻撃して大勝した。「神風」に頼るだけでなく、大国の圧力には知略で抵抗するのがこの国の伝統だ。

米軍を撃退したベトナム戦争の前、ベトナムはフランス軍を破った。両方の戦争を指揮し「ベトナムのナポレオン」と呼ばれたのがポー・グエン・ザップ將軍だ。対仏戦争の決戦となったのが1954年のディエンビエンフーの戦いである。

地下に掘ったフランス軍の司令部跡が、今も当時のまま残る。ザップ將軍の写真集があった。戦闘が終わった直後の戦場の写真に、ザップ將軍の言葉が添えてある。「陣地から見渡したとき突然、今直ちにすべき重大な任務に気付いた。ここを元通りにしなければならぬ。農民が秋の収穫をできるように」

勝利した司令官なら歓喜に酔うのが当然なとき、彼は農民の生活を考えた。この戦争が誰のため何を求めた戦いなのかを、しっかりと理解していたからである。民衆の間に根付いていたからこそベトナム軍は民衆に支持されたし、だからこそ強かったのだ。

ザップ將軍と逆の立場にいた人にも会った。旧南ベトナム政府の副首相だったグエン・スアン・オアインさんだ。ベトナム戦争の終結で南ベトナム政府が崩壊すると、高官たちは米国に亡命した。処刑されると思ったからだ。しかし、オアインさんは逃げなかった。



首都の歴史博物館には、元寇を撃退した杭が展示してある (2013年 ハノイ)



結婚式に出席したあと記念写真を撮るアオザイ姿の女性たち (2013年 フエ)

<Profile>  
いとう・ちひろ

1949年山口県生まれ。大学時代にキューバでボランティア活動に参加し、東大「ジブシー」調査探検隊長を務めた。74年から2014年までの40年間、朝日新聞記者。中南米、欧州(スペイン)、米国で3回の特派員を経験した。現在はフリーの国際ジャーナリスト。主著に「燃える中南米」(岩波新書)、「反米大陸」(集英社新書)、「観光コースでないベトナム」(高文研)、「一人の声が世界を変えた」(新日本出版社)など。

幸い、彼は処刑されなかった。やがてベトナムの経済が傾いたとき、社会主義に資本主義を加えた斬新な経済政策ドイモイを提示したのが彼だ。このためベトナム経済は崩壊を免れた。私が出会ったとき彼は国会議員になっていた。

議員室を訪れ英語であいさつすると、返ってきたのは京都弁だった。「あんたはん、よう来なりましたなあ」。戦前、日本政府に招かれて京都帝大に留学したという。驚きつつ質問した。「終戦の際、なぜあなたは逃げなかったのですか」

オアインさんは語った。「私が日本に行ってきたのは京都市です。ベトナム戦争の終戦時、米国は私にハーバード大学教授の地位を約束して亡命を誘ってくれました。でもベトナムを去れば、

それまで勉強した意味がなくなります。処刑されても当然な身ですが、万一生き残れるなら、私の知識は必ず祖国の社会に役立つと思いました」。彼は命をかけて祖国の発展のために尽くそうとしたのだ。歴史は彼の予想したとおりになかった。別れ際、彼はつぶやいた。「これまで誰にも言ったことはありませんが、理想を貫いて生きてきたことだけは自分に自慢できます」

そのオアインさんも2003年に亡くなった。二度目に会ったとき彼は「日本からベトナムに来る企業は商売だけを求めている。発展のためのパートナーになってほしい」と語った。こうした声に真摯に耳を傾け行動することが、私たちのすべきことだろう。私益のためでなく公益を、目先でなく将来を見据えた支援が必要だと思う。